

## 学習指導要領の改訂に向けた中学校・高校における柔道授業の検討

林 弘典<sup>1)</sup> 石川 美久<sup>2)</sup> 生田 秀和<sup>3)</sup>Examination of Judo Classes in Junior High and High School  
for the Revision of the Courses of Study

Hironori HAYASHI Yoshihisa ISHIKAWA Hidekazu SHODA

## Abstract

The purpose of this study was to prepare basic materials for examining the way of Judo classes in junior high schools and high schools for the revision of the Courses of Study. A questionnaire was sent to 336 university students who had taken a judo class at a university that trains health and physical education teachers. The number of respondents was counted for each question; the overall trend was analyzed, and the following was found.

1. Many respondents (41.8%) wanted to take judo classes by gender.
2. Most respondents wanted to learn choking techniques (59.5%), joint techniques (65.8%), and self-defense techniques (89.5%).
3. Most respondents wanted to do more Randoris (66.8%), more matches (63.5%), and then they wanted to do more Randoris or matches (62.2%) with different people.
4. Those who wanted to do Randoris with only their friends (41.4%) and those who did not (42.4%) were about the same.
5. Most respondents (60.9%) did not want to do Randori or matches with the opposite sex.

Key words : Budo, Judo class, Junior high school, High school, Revision of the Courses of Study

キーワード : 武道, 柔道授業, 中学校, 高校, 学習指導要領の改訂

---

1) スポーツ学部 2) 大阪教育大学 3) 大阪体育大学

## I 緒言

「武道は、武士道の伝統に由来する日本で体系化された武技の修練による心技一如の運動文化で、心技体を一体として鍛え、人格を磨き、道徳心を高め、礼節を尊重する態度を養う、人間形成の道であり、柔道、剣道、弓道、相撲、空手道、合気道、少林寺拳法、なぎなた、銃剣道の総称を言う。」と定義されている（日本武道館，2017）。2012年より武道が中学校において必修化され、2020年度の中学校における柔道実施率は52.7%であったと報告されている（日本武道館，online）。

近年、柔道における頭部外傷に関する研究（Hayashi et al., 2019, 2020；Ishikawa et al., 2018, 2020；生田ほか，2019, 2020）が進められているが、未だに急性硬膜下血腫のような重篤な頭部外傷が発生している。特に、2019年に小学生2名が急性硬膜下血腫となり、1名が死亡したことは深刻な問題である。これに加えて柔道界において暴力・ハラスメントの不祥事が後を立たない（朝日新聞デジタル，online；全日本柔道連盟，online 1, online 2, online 3）。このように、柔道は問題視されて社会的に信頼をなくしているといえる。

前述した競技柔道と中学生・高校生の柔道授業の活動内容（文部科学省，2016, 2017）はかなり異なる。しかし、世間一般から見れば両者は同じ柔道であると認識されている可能性が高い。なぜなら、ほとんどの柔道の重大事故は部活動で起こっているにも関わらず、武道必修化の実施の際に社会的問題とされたからである。

2018年の授業実施校に対する1校における傷外の発生件数では、柔道0.32件、相撲0.12件、剣道0.07件と柔道の割合が極めて高いこと（日本武道館，online）から、武道必修化における柔道の継続は危惧される。また、中学生・高校生の柔道授業において、重大な柔道事故が発生した場合、武道必修化から柔道が外されても不思議ではない。

現在の武道必修化では、「勝敗を競い合い互いに高め合う楽しさや喜びを味わうこと」「相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を守ろうとすること」など教育効果が期待されている。これに加えて、柔道において本来の教育的価値や新たな教育効果を示すことができれば、武道必修化において柔道を行う意義や価値を高めることができる。それは学校教育においても、柔道界においても有益なことである。

先行研究では、学習指導要領で示された教育効果を実証するための方法に関する研究が多く、中学生・高校生の柔道授業において、柔道本来の教育的価値（講道館，1964，online；松本，1975）や新たな価値を見いだそうとする試みは行われていない（石川ほか，2017；川内谷ほか，2016，本村ほか，2003，小林ほか，2018）。しかし、近年、包括的かつ柔軟に柔道を捕らえて中学校・高校における柔道授業の在り方が検討されている（林，2017a, 2017b；林ほか，2021a, 2021b；石川，2017；生田ほか，2021）。これらの研究は、学習者の考えを収集しており、学習指導要領の改訂に向けた貴重な資料となり得る。

そこで本研究の目的は、学習指導要領の改訂に向けた中学校・高校における柔道授業の在り方を検討するための基礎資料を作成することとした。

## II 方法

### 1. 調査対象

保健体育科教員を養成する大学における柔道の授業を履修した大学生336名（男子300名，女子36名）にアンケートを実施した。対象者は関西を中心に全国各地から入学した者であり、限定された高校から集めた偏ったデータにならないように配慮した。また、対象者には、研究内容について十分に説明を行い、同意を得てアンケートを実施した。調査は2021年7月1日～31日に直接アンケートを配布して実施した。なお、本研究は、びわ

こ成蹊スポーツ大学学術研究倫理専門委員会  
で承認されたものである（成ス大第16号）。

## 2. 調査内容

男女別習に関すること、学習指導要領で取り扱われていない学習内容、学習者が最も興味を示している乱取りや試合に対する考えについて、先行研究や著書等（林，2017a, 2017b；林ほか，2021a, 2021b；石川，2017；生田ほか，2021）を参考に、柔道高段者（六段以上）、全日本柔道連盟A指導員を有する中学校・高校の保健体育科教員を養成する大学で柔道授業を担当する教員3名が今後の中学校や高校における柔道授業を検討するための質問（10問）を作成した。

対象者には、大学で受けている柔道の授業ではなく、中学校・高校における柔道の授業を受ける場合を想定して回答するように補足説明を行った。選択肢は、「はい」「いいえ」「分からない」の3つとした。

## 3. 分析方法

質問ごとに回答者数を集計した後、 $\chi^2$ 検定を行った（田中，1996；田中・山際，1989）。統計処理には、表計算ソフト Microsoft Excel 2019 を用いた。検定の有意水準は5%未満とした。

## Ⅲ 結果

表1は、柔道の授業に対する全体の回答者数を集計したものである。

表1のNo.1より「男女別々に授業を行いたいと思いますか？」について、 $\chi^2$ 検定の結果、「はい（128名，41.8%）」と回答した割合が有意に高かった。

表1のNo.2より「絞め技（首を絞める技）を学習したいと思いますか？」について、 $\chi^2$ 検定の結果、「はい（181名，59.5%）」と回答した割合が有意に高かった。

表1のNo.3より「関節技（肘を伸ばしたり、捻ったりする技）を学習したいと思います

か？」について、 $\chi^2$ 検定の結果、「はい（200名，65.8%）」と回答した割合が有意に高かった。

表1のNo.4より「護身術（相手の攻撃をかわして蹴る・叩くなどの反撃をする技）を学習したいと思いますか？」について、 $\chi^2$ 検定の結果、「はい（272名，89.5%）」と回答した割合が有意に高かった。

表1のNo.5より「乱取り（自由練習）を多くしたいと思いますか？」について、 $\chi^2$ 検定の結果、「はい（203名，66.8%）」と回答した割合が有意に高かった。

表1のNo.6より「試合を多くしたいと思いますか？」について、 $\chi^2$ 検定の結果、「はい（193名，63.5%）」と回答した割合が有意に高かった。

表1のNo.7より「友人とだけ乱取りや試合をしたいですか？」について、 $\chi^2$ 検定の結果、「はい（126名，41.4%）」と「いいえ（129名，42.4%）」に回答した割合が有意に高かった。

表1のNo.8より「いろいろな人と乱取りや試合をしたいですか？」について、 $\chi^2$ 検定の結果、「はい（189名，62.2%）」と回答した割合が有意に高かった。

表1のNo.9より「自分よりも大きな人や強い人と乱取りをしたいですか？」について、 $\chi^2$ 検定の結果、「はい（165名，54.3%）」と回答した割合が有意に高かった。

表1のNo.10より「異性と乱取りや試合を試してみたいですか？」について、 $\chi^2$ 検定の結果、「いいえ（185名，60.9%）」と回答した割合が有意に高かった。

## Ⅳ 考察

表1のNo.1より「男女別に授業を行いたいと思いますか？」について、「はい（41.8%）」とと思っている者の割合が高いことが明らかとなった。

第一に、男女における体格差や体力差による怪我が起きる危険を心配しているからであ

表1 今後の柔道授業について

No.	質問項目	選択肢	はい	いいえ	分からない	合計	df	$\chi^2$ 値	有意差
1	男女別々に授業を行いたいと思いますか？	人数	128	63	115	306	2	23.20	p < 0.01
		%	41.8	20.6	37.6	100			
2	絞め技（首を絞める技）を学習したいと思いますか？	人数	181	90	33	304	2	109.98	p < 0.01
		%	59.5	29.6	10.9	100			
3	関節技（肘を伸ばしたり、捻ったりする技）を学習したいと思いますか？	人数	200	69	35	304	2	149.81	p < 0.01
		%	65.8	22.7	11.5	100			
4	護身術（相手の攻撃をかわして蹴る・叩くなどの反撃をする技）を学習したいと思いますか？	人数	272	18	14	304	2	431.24	p < 0.01
		%	89.5	5.9	4.6	100			
5	乱取り（自由練習）を多くしたいと思いますか？	人数	203	58	43	304	2	154.11	p < 0.01
		%	66.8	19.1	14.1	100			
6	試合を多くしたいと思いますか？	人数	193	73	38	304	2	130.43	p < 0.01
		%	63.5	24.0	12.5	100			
7	友人とだけ乱取りや試合をしたいですか？	人数	126	129	49	304	2	40.59	p < 0.01
		%	41.4	42.4	16.1	100			
8	いろいろな人と乱取りや試合をしたいですか？	人数	189	78	37	304	2	122.06	p < 0.01
		%	62.2	25.7	12.2	100			
9	自分よりも大きな人や強い人と乱取りをしたいですか？	人数	165	100	39	304	2	78.36	p < 0.01
		%	54.3	32.9	12.8	100			
10	異性と乱取りや試合をしてみたいですか？	人数	62	185	57	304	2	103.74	p < 0.01
		%	20.4	60.9	18.8	100			

ると考えられる。体格差や体力差がある初心者同士が練習することは、急性硬膜下血腫等の重篤な頭部外傷（内田，2013）を発生させる危険性があると判断し、乱取り等を行わせないように推奨されている（全日本柔道連盟，2020）。このことは科学的にも証明されている（Ishikawa et al., 2017；石川ほか，2021）。したがって、怪我の危険性があるために、受講者は男女別に授業を行いたいと思っていると考えられる。

第二に、異性を気にして学習に支障をきたすことが考えられる。現在、柔道も含めて多くの授業は男女共習となっており、柔道でも男女が一緒に同じ授業を受けることが多い。しかし、柔道において、男子と女子がペアになって学習することはほとんどない。なぜ

なら、前述の男女における体格差や体力差による怪我の問題や異性を意識して学習に支障をきたす問題に加えて、体格の異なる者とペアになった場合、掛かり練習（打ち込み）がしにくくなるからである。

その他には、男女共習であっても、お互いが直接関わることはないことから、男女別に分けても問題がないと考えている可能性がある。また、男女共習の場合、一般的に男子は女子よりも力が強く、体力や運動能力も高いために、女子よりも上達が早い傾向にある。この点について、筆者も男女共習の柔道クラスを指導していることから、女子の技能の習熟スピードは男子よりも遅い傾向にあると感じている。どうしても上手くできない女子に丁寧に指導することが多くなり、授業の進行

が遅れる場合がある。このようなことから、授業の遅れを気にしている者が男女別習で授業をしたいと思っていることが考えられる。したがって、今後、男女別習で授業を行うことについて性別よる比較が必要である。

表1のNo.2より「絞め技（首を絞める技）を学習したいと思いますか？」について、「はい（59.5%）」とと思っている者の割合が高いことが明らかとなった。表1のNo.3より「関節技（肘を伸ばしたり、捻ったりする技）を学習したいと思いますか？」について、「はい（65.8%）」とと思っている者の割合が高いことが明らかとなった。表1のNo.4より「護身術（相手の攻撃をかわして蹴る・叩くなどの反撃をする技）を学習したいと思いますか？」について、「はい（89.5%）」とと思っている者の割合が高いことが明らかとなった。

柔道と言えば、相手を投げるイメージが強いと考えられる。その理由は、オリンピックや世界選手権をはじめとして、ほとんどの大会では、投げ技によって勝敗が決まる割合が非常に高く、その場面がマスメディアで放映されることが多いからである。したがって、一般的には、柔道に絞め技や関節技があること、ましてや相手を蹴る・叩くなどの護身術（当て身技）があると認識している者は少ないと推測される。そのため護身術に関しては、約9割の者が非常に高い興味・関心を示しており、今後の柔道授業を発展させる学習内容である可能性を秘めている。

筆者が担当している保健体育科教員を養成する大学の授業では、必ず絞め技と関節技を学習させている。その理由は、絞め技と関節技の学習は投げ技や抑え技よりも、柔道が武技、武術（人を殺傷する技術）から発生した我が国固有の文化であることを学習者に実感させやすいからである。また、危険な技を理解することによって、教員になった時に生徒に危険な行為をさせないことを指導できたり、自分が「絞め技」と「関節技」をされることによって、人の痛みを理解することがで

きるからである。さらに、本学の行動指針である「人の立場になって考え行動すること（忠恕）」を理解させることに役立つからである。したがって、護身術の学習も武技、武術から柔道が発生したことを実感させやすいと推察される。今後、護身術を試験的に導入して学習効果を検証することが期待される。

表1のNo.5より「乱取り（自由練習）を多くしたいと思いますか？」について、「はい（66.8%）」とと思っている者の割合が高いことが明らかとなった。表1のNo.6より「試合を多くしたいと思いますか？」について、「はい（63.5%）」とと思っている者の割合が高いことが明らかとなった。これらの結果は、林ほか（2021b）の研究の類似した質問「乱取り（自由練習）を多くした方がよいと思いますか？（はい44名、61.1%）」「試合を行った方がよいと思いますか？（はい58名、80.6%）」と同様に肯定的な者の割合が高いことが確認された。

柔道を学習する者は、乱取りや試合に対して興味・関心が高いといえる。前述したように、相手を投げることが柔道であるというイメージが強く、それが柔道であることとらえている者が多いことから、特に立ち技の乱取りや試合を多くしたいと思っている者が多いと考えられる。

学習指導要領に示されている「相手の動きに応じて、基本動作や基本となる技を身に付け、相手を攻撃したり相手の技を防御したりすることによって、勝敗を競い合い互いに高め合う楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。」という解説からも、可能な限り乱取りや試合を実施することが望ましい。しかし、現実的には、中学校・高校において乱取りや試合を行わせることが困難であると思われる。その理由として、中学校・高校における柔道授業の総時間は平均8～10時間と報告されており、少ないところでは5時間しか確保できないために、乱取りや試合がほとんどできないことが挙げられる（石川、

2017; 日本武道協議会・全日本柔道連盟, 2017). また, 近年の柔道の投げ技による重大事故によって, 中学校・高校の教員があまり乱取りや試合を行わせていないことも考えられる.

一方, 乱取りを多くしたくない者 (58名, 19.1%), 試合を多くしたくない者 (73名, 24.4%) が一定数いたことにも注目すべきである. これらの回答者は, あまり他人と競争したくないという考えを持っている可能性がある. 柔道専門の教員であれば, 学習者に乱取りや試合を多くさせたいと思うかもしれないが, 現在の学習者の考えを考慮し, 前述した護身術 (当て身技) のような興味・関心が高い学習内容を取り入れたり, 意欲が損なわれないような運動負荷にすることが大切である. いずれにしても, 学習者の考えを収集して適切な乱取り時間や本数, 試合回数を検討することが重要である.

表1のNo.7より「友人とだけ乱取りや試合をしたいですか?」について, 「はい (41.4%)」および「いいえ (42.4%)」と思っている者の割合が高いことが明らかとなった. 現在の大学生は, 知らない人と関わるのが苦手であると推察される. その一方で, 知らない人とも乱取りを通して柔道を楽しもうとする積極的な学生がいることも考えられる.

「友人とだけ乱取りや試合をさせること」を行った場合, 学習効果が高まらないと考えられる. 友人以外と乱取りすることは, 柔道を通して知らない相手とある種のコミュニケーションを図っていることになる. どのような相手なのか (力や技, スピードの違いなど) を直接肌で感じることができる. また, 知らない相手 (個性) を理解するなど相互理解につながる. さらに, 知らない相手 (個性) を理解することは多様化の理解にもつながると考える. この意味で筆者が指導している柔道の授業では, 可能な限り同じ人と乱取りをしないように指導している. 今後の研究においても, 友人とだけ乱取りをする者と友人以

外と乱取りをする者の学習効果についても検証することが重要である.

表1のNo.8より「いろいろな人と乱取りや試合をしたいですか?」について, 「はい (62.2%)」と思っている者の割合が高いことが明らかとなった. 前述の質問において, 友人とだけ乱取りや試合をしたくない学生が42.4%存在していたことから, いろいろな人の中には友人以外も含まれていると考えられる. 一定の友人でなく, 多くの人との乱取りや試合を通して相互理解を深めることができる. その理由は, 柔道を通して直接相手の力などを肌で感じることができるからである. 会話や見た目では分からない何かをお互いに分かり合える効果があると考えられる. 今後, 質問内容を十分に検討したり, 直接知らない相手と乱取りや試合することの意義を検証することが必要である.

表1のNo.9より「自分よりも大きな人や強い人と乱取りをしたいですか?」について, 「はい (54.3%)」と思っている者の割合が高いことが明らかとなった.

自分よりも大きな人や強い人と乱取りとするチャレンジ精神は大切である. しかし, 現在, 頭部外傷の重篤な事故において, 体格差が発生原因であると指摘されている (全日本柔道連盟, 2020). また, 研究においても, 大学生熟練者を背負い投げと体落としとして投げた場合, 投げる者の体重が投げられる者より15kg重い場合, 頭部外傷リスクが高まることが示されている (Ishikawa et al., 2018). また, 大学生熟練者を大外刈りで投げた実験では, 投げる人が投げられる人より18kg重い場合, 頭部外傷リスクが高まることが示されている (石川ほか, 2021). このことから, 体格差のある者との乱取りを避けるべきである. しかし, 口頭で指導するだけでは想像しにくい. そこで, あえて体格差や体力差のある者と乱取りさせて, その違いを実感させることが重要であると考えられる. ただし, 有段者などの熟練者が十分に配慮した上で技を受け

たり、怪我のないように優しく投げるようにすると良いと考えられる。

表1のNo.10より「異性と乱取りや試合をしてみたいですか?」について、「いいえ(60.9%)」と思っている者の割合が高いことが明らかとなった。この異性と柔道をするについて、先行研究(林ほか, 2021b)では、特に男子が立ち技、固め技(寝技)ともに異性と密着する状況になることを過剰に意識していることが原因であると指摘されている。その具体的な理由として、「男子は女子の能力に合わせて手加減をしなければならないために、全力で勝負ができずに面白くない」「女子は男子から手加減されながら乱取りをするために面白くない」などが考えられるが、これらはあくまでも推論であるために、今後の男女別に分析をしたり、直接理由を調査する必要がある。

## V 総括

本研究の目的は、学習指導要領の改訂に向けた中学校・高校における柔道授業の在り方を検討するための基礎資料を作成することとした。保健体育科教員を養成する大学における柔道の授業を履修した大学生336名にアンケートを実施した結果、以下のことが明らかとなった。

1. 柔道の授業を男女別に受けたい者(41.8%)が多かった。
2. 絞め技を学習したい者(59.5%)、関節技を学習したい者(65.8%)、護身術を学習したい者(89.5%)が多かった。
3. 乱取りを多くしたい者(66.8%)、試合を多くしたい者(63.5%)、いろいろな人と乱取りや試合をした者(62.2%)が多かった。
4. 友人とだけ乱取りや試合をしたい者(41.4%)としたくない者(42.4%)がほぼ同じ割合であった。
5. 異性と乱取りや試合をしたくない者(60.9%)が多かった。

## 文献

- 朝日新聞デジタル (online) 全柔連幹部がパワハラか 関係者「隠蔽ととられても」, 2021, <https://www.asahi.com/articles/ASP2V4HNXP2VUTQP002.html>, (参照日 2021年10月17日)。
- 林 弘典 (2017a) びわこ成蹊スポーツ大学における柔道の授業について。びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 14: 205-208。
- 林 弘典 (2017b) 実践柔道論。小俣幸嗣(編著)。メディアパル, pp. 82-97。
- Hayashi H., Ishikawa Y., Anata K., Uchimura N (2019) Basic research on occurrence factors of head bruises in throwing technique of judo - influence of unexpected condition on backward breakfall -, 24th Annual Congress of the European College of Sport Science, 589。
- Hayashi, H., Anata, K., Uchimura, N., Shoda, H., & Ishikawa, Y (2020) The influence of being thrown unexpectedly in Judo on brain injuries: A study of junior high, high school, university student experts. The 2020 Yokohama Sport Conference。
- 林 弘典・黒澤寛己・坂本道人・生田秀和・石川美久 (2021a) 中学校・高校の保健体育科教員を養成する大学における柔道授業の在り方についての提言。びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 18: 25-35。
- 林 弘典・石川美久・田中 勤・生田秀和 (2021b) 中学校・高校の柔道授業の提案に対する学習者の考えについて。中学校・高校の柔道授業における学習者の経験した指導内容について。関西武道学研究, 30(1): 3-12。
- 石川美久 (2017) 実践柔道論。小俣幸嗣(編著)。メディアパル, pp. 43-58。
- 石川美久・横山喬之・久保田浩史・坂本道人・三宅恵介・小林優希 (2017) 柔道授業における受講生の意識変容: N工業専門学校を対象として。武道学研究, 49 (3): 143-5。
- Ishikawa, Y., Anata, K., Hayashi, H.,

- Yokoyama, T., Sakamoto, M., Shoda H., Mishima, K., & Okada, S (2017) Influence of the weight difference in the throwing technique of judo to the head of uke. Proceedings of the 2017 International Budo Conference, 86-87.
- Ishikawa, Y., Anata, K., Hayashi, H., Yokoyama, T., Ono, T., & Okada, S (2018) Effects of different throwing techniques in judo on rotational acceleration of uke's head. International journal of sport & health science, 16, 173-179.
- Ishikawa, Y., Anata, K., Hayashi, H., Uchimura, N., & Okada, S (2020) Influence of fatigue on head angular acceleration in judo high-intensity exercise. Archives of Budo, 16, 99-106.
- 石川美久・穴田賢二・生田秀和・林 弘典 (2021) 柔道の太外刈りにおける体重差が受ける頭部角加速度に与える影響. 武道学研究, 54 別冊.
- 川内谷一志・佐野博昭・枝元香菜子・岡村さやか・射手矢岬 (2016) 工業高等専門学校における柔道授業の成果と課題, 53 : 21-27.
- 小林優希・平岡拓晃・桐生習作・鍋山隆弘・麓正樹・石川美久 (2018) 大学体育における武道種目受講学生の武道イメージ. 武道学研究, 50 (2) : 79-87.
- 講道館 (1964) 嘉納治五郎 (2版). 布井書房.
- 講道館 (online) 柔道の教育的価値, <http://kodokanjudoinstitut.org/doctrine/word/kyouikutekikachi/>, (参照日 2021年10月18日).
- 松本芳三 (1975) 柔道のコーチング (6版). 大修館書店.
- 文部科学省 (2016) 高等学校学習指導要領解説 保健体育編・保健編 (4版). 東山書房.
- 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領解説 保健体育編 (5版). 東山書房.
- 本村清人・坂田敬一・鮫島元成・磯村元信 (2003) 新しい柔道の授業づくり, 大修館書店.
- 日本武道協議会・全日本柔道連盟 (2017) 柔道. 日本武道協議会. 三友社.
- 日本武道館 (2017) 日本武道館武道学園 創立50周年記念誌・DVD. 日本武道館.
- 日本武道館 (online) 第6回 中学校武道必修化に関するアンケート調査 (令和元・2年度実施状況調査), [https://www.nipponbudokan.or.jp/pdf/gakkobudo/budo-survey\\_202112.pdf](https://www.nipponbudokan.or.jp/pdf/gakkobudo/budo-survey_202112.pdf), (参照日 2022年2月7日).
- 生田秀和・穴田賢二・石川美久・内村直也・林 弘典 (2019) 柔道の投げ技における頭部打撲に関する実態調査. 武道学研究, 52 別冊 : 57.
- 生田秀和・穴田賢二・石川美久・内村直也・林 弘典 (2020) 柔道の太外刈りによる頭部外傷に対するマウスガードの装着効果. 武道学研究 : 53 別冊.
- 生田秀和・石川美久・林 弘典 (2021) 中学校・高校の柔道授業における学習者の経験した指導内容について. 関西武道学研究, 30 (1) : 13-20.
- 田中 敏 (1996) 実践心理学データ解析. 新曜社.
- 田中 敏・山際勇一郎 (1989) 新訂ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法 (2版). 教育出版.
- 内田良 (2013) 柔道事故. 河出書房新社.
- 全日本柔道連盟 (2020) 柔道の安全指導 柔道の未来のために (5版). 全日本柔道連盟.
- 全日本柔道連盟 (online 1) 懲戒処分の実施について (2020年09月29日), 2020, <https://www.judo.or.jp/news/341/>, (参照日 2021年11月11日).
- 全日本柔道連盟 (online 2) 懲戒処分の実施について (2020年02月28日), 2020, <https://www.judo.or.jp/news/686/>, (参照日 2021年11月11日).
- 全日本柔道連盟 (online 3) 懲戒処分の実施について (2020年12月21日), 2020, <https://www.judo.or.jp/news/4686/>, (参照日 2021年11月11日).